

清水様よりおはこひ願  
道理ひきを云ふきかせ よると云ふひるとか わからねばならん  
白いものと黒ひもののが わからねばならん よるひるとをり  
わからんたけの理迄に ゆるしをこふ 戸主やと云ふてやれハ  
おれハでゝゆく 心やすい処 一ツたより それでゆかねハ  
一銭宛もろふ その日おくわや いやしい さんねんないやしい  
押して会長公へも申上まして さとしますから御願  
さあへむつかし事せいともゆふやない ゆふた処がてきよまい  
よるひるの里かわからねバ とふむならん 此里さとすよふ

(注) 正文によれば、「道理を引き言うて聞かせ」とあり、若干、雑な文になっている。又、押しての願は、正文には掲載されていない。

15 明治廿六年十月七日 本席様へ身上御障り二付前ノ指図二付御伺

さあへ尋る処へ たすねにやなるふまい さあへとをゆふ事でありて こふ」(61オ)

ゆふ事でありて なんてありたやらわからん ぜんありてからあとの事わからん あとの事ミゑん さきからしらしおく 何年さきの事しらしおく よふきゝわけ まあ一寸になにかの事□て この中に とふいふ事情で 此中にみな日々参りてへ所々国々たんしんで でゝくる中に まちへなんてもへと云ふて でゝくる中に 席とまれバ いつまでと云ふ とりへの里になつて はやく里にさとすなら 又一ツ」(61ウ)

あれ一ツの里にあつまらず よふきゝわけ どをても こふでもすましてへてすましたなら 中ぬかにやならん みなとる事ばかりとりて これあつまりたる処 あつまりたる中に一ツへんはなしかける いまの里にこれハ世界一ツの里 とこからとをゆふ事おもふ 事情ハ一寸なれど ぜんへさとしてあるへ さとしてある里 ほとふへてかけるほどに よつておも」(62オ)

き里もあれハ かるき里もある よふきゝわけ てたもの帰る事あたりまい てたもの帰らねば 行ねば道うしのふやらわからん この時さとして 世界さかんでとゆふハたのしみ こくびかたけてしやんし 一ツてハならん たゞへしらん中から里でゝたもの そこてかたいものかたい やらこいものハやわらかい こゝろせくへ 世界かせひきた なんてあるふ これまでさきの」(62ウ)

道 年限さとしてある さき道出ル よふきゝわけ これからさきとゆふ かしこにどふゆふ事ある どこそこに とをゆふことあるふ びいくりせにやならん ひいくりせるやならん いふとどをゆふ事とまたおもふ ひつくりしたよふなよき事あれバ 色々ある そこてさきに心にさきにおさめてくれ なかの中からでるへ でたら一寸おさめにくい よふきゝわけ てたもの帰るハ」(63オ)

あたりまい てたものかいらんと云ふ これきゝわけ とをゆふ事 おいはなし なんとき出るやわからん

(注) 脱落した字句が目立つ。

16 明治廿六年十月十六日 御本席右ノ肩先から胸ノいたみに付御願

さあへたすねるてあるへ とをも尋ねんとハいられん ひるといふ ひるにわとおなりこふなり はたらきおさめている処 事情いかなる事情」(63ウ)

一ツ日々おさめている処 一ツ事情 身の処より入込で 事情さとしたい 刻限といふて せんど咄しにくい 尋ねる事情から さとしておこふ 身の処心得ん 一ツとふなるふかしらん こふなるふかしらんとおもふ あちらにもこちらにも よふな事情かさなる 又内々だいに事情 おなじよふな事情 心へみへたる 日々はたらく つくしている中に いかなる処とをとおもふ やぶ」(64オ)

んと云ふ とをもたへられんと云ふ 一寸夜あけたら とうなりこうなりはたらき とふていられん 日々むつかしい中 つとめている事情 とこからとふゆふ事とも わかるまい みな事情 よふあらためて よふこゝろへ 十分こゝろへ とんな里 たずねるともわからん たすねかけるともわからん たすねたで ふんばりているあいた おんの事上なら おさめる一寸の事ハむつかしい あとも」(64ウ)

さきもわからん 人体かりてくる事情 これむつかしい事情 よふきゝわけ 一条のへたるため 一時ノ里を以て ふかく処あつめて たれかきいても なるほどの里をさめ 何もをめおそれするやない 事情ゆるしてある その事情もつて とをれバとをれる あらへあつめてある それハ何にもならん じ上こんで あつめてある そこでかしこにはなし 事情ハこんであつめてある」(65オ)

それハなんにもならん事あつめてあるから さきあいた口ハふたがらん おくもしらず さきもしらず 人の口かりて 一寸はなしがはたらきするもの これ一寸むつかしい みぎとゆへハ あくのしらせ 左とゆゑバぜんのしらせ これハさき 又しらし これたけ一寸こゝろへてとれるよふ」(65ウ)

(注) これも脱落箇所があり、意味不明なところがある。たとえば、7行目最後から8行目にかけて、「よふな事情」とあるが、正文と対照すると、その前の「案じる」という言葉が抜けている。同様に64ウの最後から1行前、「おんの事上ならおさめる」は「同んなじよなら治める」である。さらに65オの2行目「話」一条述べるため、となる。

17 明治廿六年十月廿二日 本席様御喰被下二あじのあるないの願

さあへたずねる処 さあへかきとれへ この事情もかきとれよ なかい事情へ まあいくへ道も ながへ道とをりへた道である 是から先 一時一寸むつかしい 又たむつかしい とふゆふ道 むつかしいなら いつれへみちがくる 一時かとおもへハ 一時てハない 年はきらん なかく心足」(66オ)  
迄一時ところ事情 だんへわかりて 日々さとしへ 一寸心二とつた事がある とふゆふ里 なかへの事情へ 何年とハゆわん 何ヶ月とハゆゑん よふきゝわけ とおい処からにをいとゆふ 又風ノたよりと云ふ とをい処から風のたよりにをいとをゆふ事 あとへの処 あとへおさまり 此のおさまり万事である 日かくれ八十分治まる よく事情きゝ」(66ウ)  
とりてをさめる 心一つておさめるへ